

# ウェブ産経

## 産経新聞ファンクラブ

### 日本柔道整復師会 モンゴル訪問 伝統的治療を指導

日本柔道整復師会の一行が3月下旬、モンゴルの辺境を訪れ、現地の医師たちに伝統的整復術を指導した。

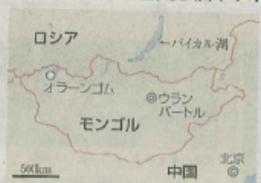
一行は鏑野哲士、本間琢英、五反田重夫、亀山実、久米信好、根来信也さんの6人。国立健康科学大学のアマルサイハン教授が同行した。

訪れたのは、モンゴル北西部の町、オランゴムだ。見渡す限りの雪原が広がる。宿泊施設にはシャワーがなく、夜は氷点下20度まで冷え込む。寝袋にもぐりこんで眠った。毎日、骨付きの羊肉をナイフで削って食べ、体力を維持した。

講習会には現地の医師や医療関係者ら78人が参加。現地視察したツオルモン厚生副大臣は「日本の伝統的な柔道整復術を、身をもって習得してくたさい」と呼びかけていた。

モンゴルは、騎馬民族の国だけに地方では落馬での骨折や脱臼が多い。ところが、高度な医療施設は、整っていないのが現状だ。柔道整復師たちは針金、包帯、テープ、ポリ袋など現地ですべての材料を活用する。また、腕の骨折、肩の脱臼など具体的なケースに応じて指導した。受講者たちは机から身を乗り出し、実習を見つめ

る。テキストだけでなく、患部を触り、頭脳と体を駆使して治療方法を学んだ。30分離れた町から乗り合い四輪駆動車でやってきた若い女医、ヤンジンさんは「柔道整復術は効果的です。すぐ、患者に活用できます」と笑顔で話していた。



## 酷寒の辺境で実習

講習会の最終日は、ちょうど、久米信好さんの誕生日。受講者たちがケーキをプレゼントし、オランゴム賛歌を合唱して祝った。久米さんは「感激しました。泣きそうになりました。来てよかった」と語る。別れ際、受講者全員が日本語で「アリガトウゴザイマシタ」。感謝の拍手がいつまでも響き渡っていた。

(文・写真 塩塚保)



モンゴルの辺境、オランゴムに到着した日本柔道整復師会一行。現地で伝統的整復術を指導した。